


## 会員プロフィール物語

テーマ	土木屋として「30年の朱夏」を生き抜いて	
記入年月日	平成 29 年 5 月 12 日	
氏名	有岡正樹（ありおか まさき）	
技術士資格 分野	建設部門（土質・基礎）	
他の資格	一級土木施工管理技師、公害防止監理者（振動） 工学博士（京都大学）	

### 自己紹介；主な経歴（生年、出身地、学校、職歴など）

#### 【生地・学歴】

昭和 18 年京都生まれ、昭和 37 年京都府立洛北高校卒業、昭和 42 年京都大学工学部交通土木工学科卒業、44 年同大学大学院工学研究科修了。

#### 【職歴概要】

- 1969. 4 (株)熊谷組入社、大阪支店地下鉄作業所主任・所長
- 1984. 1 (株)熊谷組豪州支店 P N G 出張所長、支店次長 (シドニーハーバートンネル会社重役)
- 1991. 5 (株)熊谷組エンジニアリング本部および営業本部部長
- 1994. 1 (株)熊谷組大阪地下鉄工事所および大阪営業所所長
- 1997. 4 (株)熊谷組エンジニアリング本部本部長
- 2001. 4 (株)熊谷組営業本部 執行役員副本部長、P F I 担当
- 2002. 4 (株)熊谷組技術研究所所長、都市再生・P F I プロジェクト室長歴任
- 2004. 4 (株)熊谷組顧問、2009. 3(株)熊谷組退職
- 2009. 4 NPO 法人「社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会」理事長

#### 【代表的委員／教職／著書／論文等】

- [委員] 1999. 10～2001. 10 内閣府「P F I 推進委員会」専門委員等
- [講師] 2004～2010 立命館大学大学院客員教授ほか 10 大学ほか 11 大学
- [共著] 「完全網羅 日本版 P F I」(山海堂) ほか 7 冊
- [論文] 「B O T 方式におけるリスク管理」日本リスク研究学会誌 8-(1) (1997) ほか多数

### わが青春時代（最前線で活躍する建設技術者に憧れた背景）

生家は「有岡工務店」という地方の測量・建設会社だったようで、父も当然のようにそのあとを継ぐことになっていたが、昭和 4 年（1929 年）の世界恐慌のあおりを受けて倒産し、“手当をくれる学校があるのでそこへ行け”との祖父の一言で京都師範学校に入学し、小学校の教師となったようだ。

子供のころ 2 階居間の小さな押し入れに、測量用三脚や下げ振り、製図版・T 定規に烏口（カラスグチ）などが雑然と残されており、父が土木技師を目指していたこと窺われた。酒が入ると京阪電鉄線路工事の現場を手伝ったことなどを話してくれたが、一時いずれはと思っていたのかも知れない。それらを引っ張り出して、何に使うのか分からないまま遊んだのを憶えている。

大学入試にあたり迷うことなく土木系工学科を選んだのも、そんな祖父の血筋を引いていた

のだろうし、何よりも父がその入学を自分のことのように喜んでくれた。ただ、物心がついてから大学の学部3年で専門科目を履修し始めるまでは、大工仕事が好きな程度で、中学時代から大学4回生までクラブ活動でテニスに打ち込んだのが、青春の過半であった。学部3年夏休みと4年夏休みの2回計2ヵ月半の実習で少し実務的なことが分かってきたものの、就職については漠然とダムや鉄道建設に関わる仕事をといった程度であった。そしてそろそろそれを具体化しようと思い始めた大学院2回生の4月(1968年)、封切られて間のない映画「黒部の太陽」を見て‘これしかない’と土木系建設会社熊谷組に入社することを決めた。

ただ結果的には、父の血を引いて大学の教育にも関わったりできたことで、草葉の陰で喜んでいてくれると信じている。

## わが「朱夏時代」(技術を中心にやれることをやる尽くした30年)

### 1. 現役時代の技術内容の総括(特筆すべき4つの分野)

以下二つの業務経歴に関わる事項からも類推されるように、特筆すべき業務内容およびそれらに関連する社会への貢献については、以下の4つの分野に集約できる。

**1つ目は、R eエンジニアリング業務で、最初の現場である地下鉄シールド工事の補助工法としての遮水壁に隣接工区の粘性土を有効利用したのを皮切りに、新たな現場を担当する度にリサイクル等に取り組んできた。とくに後年開発したR e S M (Re-produced Soil Materials) 工法は、現在も有効に現場適用されている。これらを受けて、エンジにリング本部長時代には、renewal, restore, refine 等々R eで始まる多くの言葉を系統的に整理・分析してエンジニアリング体系化することを提唱した(2002年度土木学会全国大会)。**

**2つ目は、新しい社会資本整備の手法としてのP F Iに関する業績で、豪州シドニーハーバートンネルB O T事業の経験をベースに、日本でのP F I議論に積極的に関与し、建設産業のビジネス化に取り組んできた。具体的事例として上越市民プラザが上げられるが、リニューアルをベースにしたP F Iとして評価が高い。編著に係わった図書「完全網羅日本版P F I」は第6版まで増刷され、日本におけるP F I事業の展開に貢献してきた。**

**3つ目は、上記P F Iにも大いに関係する、いわゆるプロジェクトマネジメント分野であり、とくにリスクマネジメントについて論文や講演も多い。国際的に見て日本が遅れているマネジメント分野の重要性を、P F Iという新しい仕組みをベースに機会ある毎に主張してきており、鳥取大学では1回生に「建設マネジメント」として講義している。2003年度鳥取大学がJ A B E Eの資格審査を受けた際、講師としてヒアリングにも立ち会った。**

**4つ目は、オーストラリアを中心に南太平洋地域で7年余にわたり係わってきた経験をもとにした、建設産業の国際化への貢献である。シドニーオリンピックが決まった時、当時の仲間からインフラ整備に関わった貢献に謝意のメッセージを受け感激した。その後彼らによる道路審議会メンバーやJ A P I C他の研究会に対する日本での講演を仲介した経緯がある。現在も、日豪留学生の往来を支援し、次世代エンジニアの国際的育成にも係わってきた。**

### 2. 現役技術者としての立場とかかわった技術の概要年表(カッコ内は年数)

現役時代を「朱夏の30年」と称して、下記の年表を用いて時折振り返ることがある。概ね3年単位の仕事に「(起)承転結」ではないが10件関わったことは幸せであった。それぞれにおいて特に技術的なかわったことを物語的に振り返っておこう。

四季	年	年数	内 容
	1943		5月30日誕生
青春	1969	26 *	保育所・小学校・中学校・高校・予備校・大学・大学院
朱夏	1971	2 0	熊谷組入社、大阪支店土木設計課
		12	① 地下鉄今市作業所(設計主任)
			② 守口共同溝作業所(主任)
			③ 地下鉄大日作業所(副所長→所長)
	1983		④ 地下鉄新金岡作業所(副所長→所長)
		8	⑤ 海外勤務(オーストラリア・パプアニューギニア)
	1991		⑥ 海外勤務(シドニーハーバートンネル、支店次長)
	1993	3	⑦ エンジニアリング・営業関係
	1997	3	⑧ 大阪地下鉄工事所長(3現場統括)
	2001	3	⑨ エンジニアリング本部長
	2004	3	⑩ 経営(営業本部・技術研究所・都市再生/PFIプロジェクト室)

### 【1967. 4～1969. 3】 京都大学大学院工学研究科 (2)

京都大学工学部交通土木工学科路盤基礎工学研究室(赤井浩一教授)のもと、不連続地盤を担当。学部時代を模型実験等もとに、結晶片岩(緑泥・石墨)の層理・節理の方向性と強度との関係を実験的に研究。3次元応力状態での力学的特性、ならびに層理・節理の方向性と縦波伝搬速度について実験的研究を行い、定量的な関係と理論的な考察を行っている。

### 【1969. 4～1971. 1】 熊谷組入社、大阪支店で土木設計および現場管理業務に従事 (2)

土木設計課で、構造物基礎、山岳トンネル、開削工法、地盤改良等様々な土木技術設計を学ぶと同時に、ダンプ基礎地盤液状化対策工法などを設計。また、初めて技術研究所に導入された電子計算機のプログラム開発も係わり、土留め計算や測量データ処理等を担当。そのほか、ケーソン大規模事故の原因調査チームに加わり、安全管理の重要性について身をもって学ぶ。

### 【1971. 2～1983. 8】 大阪支店管内地下鉄工事現場管理業務 (1 2. 5)

#### (1) 地下鉄今市作業所

最初の現場として、設計主任の立場でシールド工事に係わる技術工務関係を担当。シールドが、淀川につながる第2滞水砂礫層を延長約350m通過するというので、その間の切羽安定が大きな課題となる。R Iによる地下水追跡調査他多方面からの調査、分析を経て、両側遮水壁+内部地下水低下+圧気工法を採用するが、遮水壁については隣接工区で発生する洪積粘土を使用してソイルモルタル化し、建設発生土の有効利用を図る。R e エンジニアリングの端緒。

#### (2) 守口共同溝作業所

建設省発注の共同溝工事の主任技術者として工事全般を担当。国道1号線下ということで交通対策が課題。初の現場責任者として、QCDS全般に責任と権限を持って現場運営に当たる。

#### (3) 地下鉄大日作業所

監理技術者(後半は現場代理人)として、開削工法による地下鉄駅部および終端部構内車庫部建設工事を担当。第1, 第2滞水層に豊富な地下水を滞留しており、柱列杭遮水壁+親杭横矢板工法が採用されるが、遮水壁材料に岡山粘土を用いてソイルモルタル化し、ラップを容易にすることにより遮水性向上を図る。また、車庫部渡り線部の2.5m厚のスラブコンクリート打設については、マスコンクリート対策として地下水によるパイプクーリングシステムを採用。

#### (4) 地下鉄新金岡作業所

監理技術者として、開削工法による地下鉄駅部建設工事を担当。地下鉄構造物特有の複雑な配筋に対してTQC手法を導入して、精度の向上と工程の短縮を図る

### 【1983. 9～1986. 5】海外本部シドニー営業所課長（3）

オーストラリアを中心に南太平洋における土木インフラ工事の開拓に関与し、85年からシドニーハーバートネルプロジェクトの民間事業化を主導、86年6月オーストラリアで最初のBOT事業としてNSW州政府との契約に至る。CPIボンド他ファイナンスアレンジメントにも関与。英国でのPFIにも影響を与える。また、パプアニューギニア出張所長を兼務し、ODAプロジェクトであるラウナ4発電事業現場を統括すると共に、市場の開発に関与。

### 【1986. 6～1991. 4】海外本部豪州支店次長（8）

シドニーハーバートネルSPCの取締役として事業の建設段階に深く関与すると共に、豪州支店次長として太平洋域でのインフラ事業開拓を担当。中でもシドニー～メルボルン間950kmの新幹線構想は1兆円規模の大プロジェクトであり、BHP他地元大手3社とコンソーシアムを組んでBOT事業化に参画。日本の新幹線技術の導入も視野にJARTS等とも連携。

### 【1991. 5～1993. 12】エンジニアリングならびに営業部長（2.5）

### 【1994. 1～1997. 3】大阪地下鉄工事所所長（3）

大阪市交通局7号線19, 18, 20工区を統括すると共に、18工区については現場代理人として現場を直接指揮する。海外での経験を生かして、QCDSすべての面においてリスクマネジメントの考え方を導入し、成果を上げる。また、技術面では土圧シールド残土の有効利用等Reエンジニアリングに取り組み、ReSM工法を開発し、15～20工区に水平展開。

### 【1997. 4～2000. 12】エンジニアリング本部長（3.5）

本部長として、交通・物流、駐車場施設、高度生産、社会システム、Reエンジニアリングの5グループ及び耐震事業推進室、エンジ開発室の2室の業務を統括し、①設計・建設技術力、②ライフサイクルエンジニアリング力、③マーケット企画力、④ファイナンス力、⑤法的対応力および⑥リスクマネジメント力の強化を図る。PFI関連では、日本での黎明期として建設省、経済企画庁や民間諸団体の研究会メンバーとして議論に参画すると共に、報文、講演多数。

### 【2001. 1～2002. 3】営業本部副本部長（2）

営業本部担当として、官民顧客への技術・エンジニアリング営業を担当。また、PFIについても内閣府民間資金活用事業推進委員会専門委員として、PFI法に基づく基本方針、ガイドラインの策定に関与するほか、JAPIC次世代民活事業研究会主査として約50名からのメンバーと共に研究活動を行い、報告書を公表すると共に適時政府等への提言も行う。「完全網羅日本版PFI」および「21世紀建設産業はどう変わるか」の図書を編著。

### 【2002. 4～2003. 6】技術研究所所長（1）

所長として研究所業務を統括管理すると共に、日本土木工業協会や建築業協会関連の委員会等に委員として参画、それらの成果を当社研究開発業務に反映。対象分野は、土木、建築以外に交通システム等ソフト分野も含まれる。自らもReエンジニアリング分野に直接関与。また、研究所長と兼務で、PFIについても担当役員として深く関わっており、土木学会建設マネジメント委員会小委員会の副委員長を始め諸団体で主導的役割果たし、成果を上げている。

### 【2003. 7～2004. 3】都市再生・PFIプロジェクト室長（1）

PFIについては、これまで社外活動および担当役員としての総括的な役割であったが、本部長のライントップとしてPFI事業化実務に関与。神戸大学附属病院駐車場、長泉町一般廃棄物処分場、豊川市斎場等の事業応札に参加。

### 【2004. 4～2010. 3】熊谷組顧問・立命館大学客員教授ほか教職兼務（6）

執行役員退任後顧問として、引き続きPFI関連を中心にJAPIC（日本プロジェクト産業協議会）次世代民活事業研究会主査、土木学会建設マネジメント委員会委員兼PFI研究小委員会副委員長、NPO風土工学デザイン研究所監査役等外部団体に深く関与するほか、立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント科客員教授、鳥取大学非常勤講師として、次世代を担う土木技術者・エンジニアに国内外で得た体験を継承すべく尽力している。

### 3. 現役を離れて技術者としての立場で社会貢献に関与（カッコ内は年数）

#### 【2009. 3～】NPO 法人 NPO 法人社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会理事長

2009年3月本NPO法人設立、理事長に就任し、同年10月内閣府より認証を得て現在に至る。国内外の中央政府・地方自治体・企業・コミュニティ・市民等に対して、シニアエンジニアの豊富な経験と知識を活用した社会基盤ライフサイクルマネジメントに関する調査、研究開発、政策提言および技術・法務・経営サポート活動事業等を行い、社会全体の利益の増進に寄与することを目的としており、具体的には、PFI・PPP事業手法の提案、自治体インフラ維持管理・更新策の提案、東日本大震災がれき処理対策の政府・自治体への提言と海外でのCapacity Building活動などを行っている。

さらに2014年からは、土木学会とも連携してのシビルNPO連携プラットフォームに関わり、NPO法人や法人賛助会員、サポーターなどを支援するサービス提供部門の常務理事を担当している。NPO建設技術監査センターもその会員で、五艘代表以下何人かの会員が優れた技術力を通じての社会貢献について連携を密にしている。

以上のシビルNPO法人活動も来年は10年の転機となり、次にできることを模索中である。

#### 技術者として伝承したい3つの「対」のことは

これまでも機会あるごとに話したり書いたりしてきたのだが、3つの対の言葉を確認しておきたい。一つ目は、「存在感」と「達成感」で、個人的にはもちろんだが、自分の部署や組織としても同様である。二つ目は「意識」と「情熱」です。目標を持っていてもそれをやり抜く執念がなければ成就しないし、一生懸命やっても目的意識がなければ結果は望めない。三つ目は二つ目とも関係するが、「意を尽くして」かつ「労を惜しまず」ということである。“お客様のお客様が、本当のお客様”をいつも心して欲しい。【2009. 3 熊谷組退社にあたり】

#### これから見続けていきたい「夢のまた夢」

日本は世界一の長寿命国といわれるが、ほんとうにそうであろうか。縁があって2～3年に一度は、シドニーを訪れることがあるが、そのたびにいつも思うことである。もちろんその楽しみの一つは昔仲間とゴルフだが、スルーで回ることになるので、掛かっても1ラウンド4時間前後である。午前中にゴルフに興じて、午後は庭の手入れをしたり、場合によっては家族とテニスということもある。日本では朝6時に家を出て戻るのが8時頃と、まさに1日仕事である。安くなったとはいえ交通費などを含むと倍近く違う。どちらも1日なのである。

要は1日の「質」が違うのである。スポーツなど戸外で体を動かすことが好きな私にとって、季節が逆転するオーストラリアでの夏の半年を過ごし、4月から9月までは陽の長い日本でというのが余生の「夢」である。【2002. 1「アニマトゥール」新年号”夢のまた夢”より】